EURO-NARASIA Q
EURO-NARASIA Q
Re-Oriented Media Sent from Nara
vol. 21
MARCH 2022 令和 4年 3月

ちょっと、ソグドまで。

胡姫はペルシア人ではなくソグド人の女性
森安孝夫 4

イラン語文献に見えるシルクロードの女性の生活
――シルクロード交易と関連して――
吉田豊 16

正倉院の鷲連珠文錦について
影山悦子 30

SERIAL REPORT 第17回
飛鳥・奈良と『汎ユーラシアのイラン文化』
青木健 38

和と洋の花開く街・奈良 <第3回>
荒井敦子 44

『餅飯殿の由来―箱屋勘兵衛縁起』(口絵カラー) 2

井上円了研究序説 ―妖怪博士の奇想―
中島敬介 <第2回> 58

AN ORIGIN OF NARA'S CULTURE
春日物
岡本彰夫 64

INFORMATION
奈良県×陝西省 交流の軌跡
奈良県・中国陝西省友好提携10周年記念イベント紹介 54

EURO-NARASIA Q vol. 21 2022年3月発行

企画・編集・制作・発行
Planning/Editing/Production/Distribution
奈良県立大学ユーラシア研究センター事務局
(編集責任者：中島敬介)

印刷・製本
Printing/Binding
岡村印刷工業株式会社
Printed in Japan

掲載写真・図のうち 表紙/下記、表紙裏, p1, 裏表紙/事務局、p5, p10, p12, 13/森安孝夫氏、p18, p21, p22, p24, p27/吉田豊氏、p40～42/青木健氏、p50, 51/荒井敦子氏 提供。p51歌詞/荒井敦子氏 提供。

本誌掲載の写真、記事の無断転用を禁じます。
Copyright@2022 Nara prefectual University. Allrights reserved.

本誌に掲載された記事・論文に関しては、所属団体や奈良県立大学等の公式的な見解を示すものではありません。
The articles and essays published in this magazine constitute the opinions of their authors and editoes and do not necessarily reflect the officialopinions of the organizations to which the authors belong, nor those of Nara Prefectual University or any other associations and government bodies.

固有名詞や事実関係については、インタビュー・取材・引用等においては、基本として発言や掲載内容に沿っています。
本誌収録の写真等の著作人格権等につき、所在不明などのため事前連絡できないものがありました。お心当たりの方は本センター事務局(電話 0742-93-7245)までご連絡ください。

◆ 表 紙 當麻寺 増長天立像(重要文化財)／撮影・提供 株式会社飛鳥園
◆ 裏表紙 胡人俑／西安市歴史博物館蔵

彩絵胡人騎臥駝俑 西安市歴史博物館蔵

三彩載物駱駝 西安市歴史博物館蔵

「嫌われ者」は背負った重みに、今も苦しむ

葬り去られた「学匪」――嫌われ者考〈2〉

彼〔蓑田胸喜〕は〔…〕学問的蘊蓄は少しもなく、学説を叩くのも、学的論争はそっちのけで、激越な口調で不敬呼ばはりをし凡ゆる悪罵を以て執拗極まるデマ宣伝、人身攻撃をつゞけて、右翼の仲間に策動せしめ、最後には告訴沙汰にまで及ぶといふ悪辣極まる手段に出で、学者にあるまじき学会の敵であつた。

蓑田は、1940年（昭和20）に出版された『旋風二十年』の「葬り去られた『学匪』」（中項目名）の中で、「文化犯罪者」（小項目名）の烙印を押された。

著者は大手新聞社の社会部長で、後に論説委員長に就く人物だ。サブタイトルを「解禁昭和裏面史」とする本書には「さまざまな制約のために公にされなかった史実が、多分に折り込まれて」（「序」）いたからだろう、終戦直後の大ベストセラーとなった。著者は「序」で「抑圧された言論、歪められた報道は、われ等が現にそのなかで生活して来たわづか二十年の歴史を全く辻褄の合ひかねるものとしてゐる」と憤り、「あと書き」で記述の素材は「最も真実なものを選び分け」たと言い、急な出版は「時代がかやうな種類のもの、一日も速く現れることを待つていると信じたから」だと胸を張る。

確かに「時代」が「最も真実なもの」を「待つてい」たのは間違いない。だが「蓑田＝学会の敵」は、確かに「最も真実」なのか。そうだとしても「二十年の歴史」の中の「学会」は純真無垢の善玉で、蓑田は救いの余地無き悪玉なのか。蓑田が叫んだ「悪罵」も「不敬呼ばはり」も、この書の著者が蓑田を指して言う「ごろつき」や「ひどい神憑りの右翼の御用学者」も、同じレベルの罵詈雑言にしか映らない。違いはせいぜい蓑田と著者のどちらがより「たちが悪い」かという程度の差でしかない。その程度が問題だというのなら、比べてみようか。

『旋風二十年』では、蓑田が美濃部を「学匪」と罵り「社会的に葬つた」とされる。だが正確を期すれば、蓑田の批判（罵り）があり、その後美濃部の学説が帝国議会で問題にされ、美濃部は議場で長時間の弁明演説まで行った。もちろん公開である。葬られたのは、その後だ。蓑田が直接葬ったのではない。冷たく言えば、美濃部の弁明を当時の社会が是認しなかったのだ。

一方、蓑田は『旋風二十年』の著者から「文化犯罪者」と決めつけられ、初版本で以下のように括られた。

美濃部博士を『学匪』と罵つた彼（蓑田）、終戦後、戦争責任の明確化が叫ばれてゐる現在、彼自身にこそ『学匪』の名は返上さるべきであらう。

2年後に出版された合本版では、前年の蓑田の死亡で記事が補訂され、次のように変更された。

美濃部博士を『学匪』と罵つた彼（蓑田）は、終戦後郷里〔…〕に引き籠つてゐたが精神に異常を来たして昭（ママ）廿一年二月縊死をとげた。

初版本も合本版も項目名は変わらない。どちらにおいても蓑田は「葬り去られた『学匪』」の中の「文化犯罪者」である。だが「葬り去られた『学匪』」の対象は、初版本と合本版では真逆に反転している。初版本の「学匪」が、蓑田に罵られた美濃部らを指しているのは、「彼自身にこそ『学匪』の名は返上さるべきであらう」の一文からも明らかだ。著者は、美濃部を「学匪」と罵った蓑田に向かって、お前こそ「学匪」じゃないかと罵っているのだ。だが、まだ蓑田は葬り去られてはいない。

ところが、合本版ではそうではない。既に亡くなっていた蓑田は、「学匪」の名を突き返すべき対象ではなくなっている。見直されたのではない。著者の主観としては、蓑田が「狂死」した瞬間に、蓑田に「葬り去られた『学匪』」・美濃部の怨みは晴らされて、逆に蓑田が「葬り去られた『学匪』」となったのだ。蓑田には――美濃部と違って――学匪の汚名を晴らす弁明の機会も与えられなかった。

『旋風二十年』は2009年に――初版でなく合本版が――翻刻されて文庫本になった。巻末の解説には「この書は〔…〕新聞記者たちの自戒と自省の書」と記されている。それが事実なら、そして今日なお蓑田胸喜のおでこに「べたり」と貼り付いたままの「極右国家主義者」や「狂気」のレッテルが、戦後のベストセラー『旋風二十年』の仕業なら、蓑田の思想や言動の傾きを問う前に、「新聞記者たちの自戒と自省」の内実と、ジャーナリスティックな蓑田への批評や批判の正当性が問われなければならないだろう。

（了）

文・中島敬介